



情熱の国

ブラジル



～サンパウロ日本人学校での3年間～

## I. はじめに

サンパウロは、1200万人以上の人々が暮らす南米最大の都市です。言語はポルトガル語ですが、とても気さくで親切な方々が多く、コミュニケーション上のことで困ったときなど、私自身、何度も助けていただきました。また、日系の人々も多く、これまでのその方々による貢献が、私達のこの国での暮らしやすさに反映していると感じました。

居住区には多くのビルが林立し、日本では東京や大阪などと同様な大都会で朝晩の交通渋滞も日常的です。しかし、少し車を走らせて郊外に出れば、地平線が目に飛びこんでくるとともに、その視界には見渡す限りの広大な大地がどこまでも続き、ブラジルという国のスケールの大きさをすぐに実感することができます。その広大さは、車を運転していると北海道にも似た感じがします。ただ、治安については海外に出ればどこでも同様ですが、日本と感覚が同じというわけにはいきません。必要な防犯意識と行動は常に持ち、実践することが大切でした。

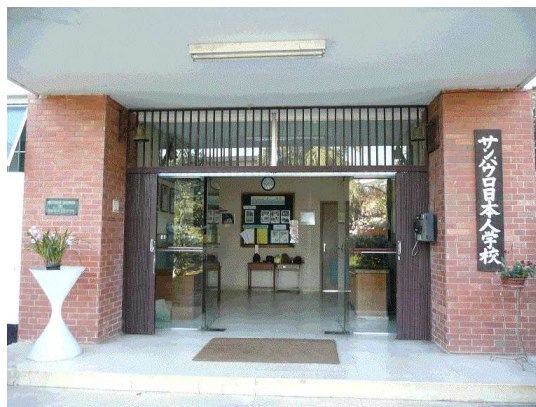
サンパウロ日本人学校の特長として、まず挙げられることは、12万平米（東京ドーム2個半）という広い敷地と沢山の自然にあふれた環境、そしてそこで明るく、伸びやかに過ごしている子どもたちです。現在、200名を超える児童・生徒がその自然に親しみながら、勉強に、運動に励んでいます。大半の子ども達がスクールバスで

岩見沢市立幌向小学校 教諭 高橋 一徳

（サンパウロ日本人学校 前勤務）

登校してきますが、バスが到着すると「おはようございます！」という元気なあいさつが毎朝校内に響き渡っていました。

サンパウロ日本人学校の教育目標の一つは、「国際社会で尊敬と信頼を得る人間の育成」ですが、これまでその具現化を目指して、現地校等との交流を多彩な形で進めてきました。そんなサンパウロ日本人学校の様子やサンパウロ、そしてブラジルの様子を少しでも皆様にお伝えすることができますと幸いです。



## II. サンパウロの概要

サンパウロ州は面積が1,500km<sup>2</sup>あります。サンパウロ市の人口は約1,200万人で、周辺の地域も含めると1,700万人余りが住む南アメリカ最大の都市です。

地図で見るとかなり暑い所と思われがちですが、標高800mの高原に位置しているため、1年を通じて過ごしやすい気候です。サンパウロは「1年に四季がなく、1日に四季がある。」と言われ、月平均の気温の差よりも1日の気温差の方が大きく、年間を通じて朝夕

冷え込むのが特徴です。そのため、衣服の



調節を上手に行うことが欠かせません。

ご存知のように、北半球にある日本とは季節が逆になります。冬の7、8月には、まれに霜も見られますが、最低気温はほぼ10℃以上です。

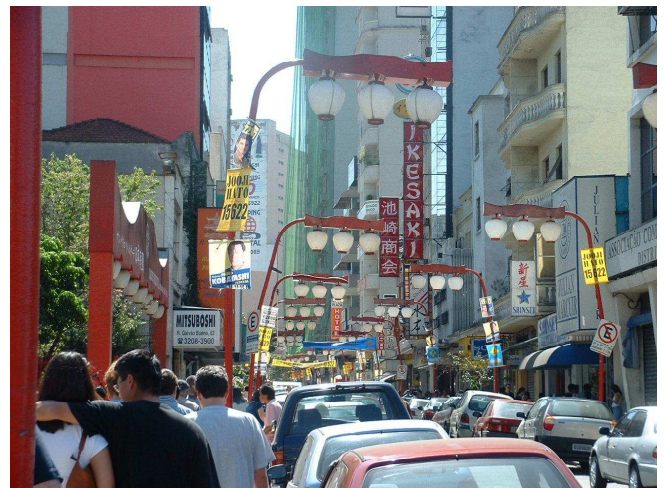
年間を通じて日中の陽射しは強く、晴天の日中は7、8月でもシャツ1枚で過ごせるほどです。1、2月は暑い時期ですが、日陰に入れば涼しく過ごせます。年間の降水量1,300mmのほとんどが1、2月の雨期に集中し、毎日のように雷を伴う強烈な夕立があります。洪水が起き、交通機関がストップしたことがある程です。しかし、1、2時間後には何事もなかったかのように落ち着き、涼しい夜を迎えることができます。

サンパウロ市は、ブラジルだけでなくラテンアメリカ全体の商工業の中心地で、世界各地から移住してきた人々、先住民、混血の人々などがおり、まさに『人種と民族の坩堝』と言えます。市内には10～20数階建ての高層ビルが林立し、日本の進出企業のほとんどもここに事務所を置いています。

日本からブラジルに渡り生活している人々(日系人)の多く(約150万人)もここに住んで

います。日系人は、様々な分野で活躍しています。中でも農業での活躍は素晴らしく、ブラジルの農業を一大飛躍させました。「ブラジル国民が野菜を食べるようになったのは、日本人のおかげである。」と言っても過言ではありません。日本にあってブラジルにない農作物はないほどです。

このような歴史的、社会的背景から、他の国に比べて「外国人」という偏見をもたれることなく生活できました。様々な人種、民族がポルトガル語を共通語とし、分け隔てなく暮らしています。日系人は、商業においても活躍し、リベルダージという地区を中心に貿易、観光、食料品、食堂、理容・美容、ホテルなど、多くの店を経営しています。



(リベルダージ地区周辺)

これらの店の多くは日本語が通じます。日本語の現地新聞も「ニッケイ」「サンパウロ」の2紙があり、さらに日本語の通じる文化施設や医療機関も整っています。日本語の出版物も数多くあります。商店は至る所にあり、また、大型ショッピングセンターも数多くあります。日本製品とは品質やデザイン、使い勝手などで多少の違いはありますが、生活用品は何でも揃います。買い物やレジャーも楽しめます。親切な人が多く、ポルトガル語が上手でなくても、「何をしたい」という意思さえはっきりしていれば、言葉の壁を乗り越えることができます。

サンパウロ市内は、車(自家用車、タクシ

一、バスなど)、地下鉄が主な交通手段です。車が多いため大気汚染、交通渋滞が大きな社会問題になっています。また、歩行者よりも車が優先される点や、運転の仕方(右側通行、左ハンドルのマニュアル車)、あるいは運転マナーなど、当初は戸惑うことが多くありました。しかし、1908年以來およそ100年以上にわたって日系人の方々が努力してこられたこともあり、私たち日本人にはとても暮らしやすい街でした。

目的さえしっかりしていれば、豊かに暮らすことのできる街、それがサンパウロです。

しかし残念なことです、ブラジルや近隣諸国の政治、経済情勢の変化に伴って、サンパウロ市や周辺地域の治安は悪化の傾向にあります。そのため、常に次のような点に留意して生活していました。

- ・万一の時のために、命の代価になるお金(命金)を常に携帯する。
- ・一人歩きはできるだけしない。通行中も周りに気を付け、不審な人の近くは避けて歩く。
- ・危険な区域へは絶対に立ち入らない。夜間の外出はできるだけ避ける。
- ・どんな場所でも、絶対に荷物から目や手を離さない。
- ・車に乗る時は必ずロックをし、窓も閉める。
- ・必要以上の装飾品は身に付けない。

「ここは外国である。」ということを感じ、自分の安全は自分で守る」という世界の常識を、いつも意識して行動することが大切であると、常々先輩教員や領事館職員から言われていました。



(居住区周辺の町並み)



(地下鉄)



(セントロ  
中心地)

### Ⅲ. サンパウロ日本人学校について

#### (1) 学校の概要と教育実践

○設立の主旨～「ブラジル国に滞在する児童生徒に対し、ブラジルの文化等、ブラジル国情について教育を与えるとともに、日本の学校教育制度への編入を希望する児童生徒に、それが直ちにできるように、日本語による基礎教育を実施するための施設を設置し運営する」ことを目的として在サンパウロ総領事館および保護者有志により、昭和42(1967)年8月14日設立されました。

○本校の教育～学校教育目標「豊かな人間性、確かな学力、たくましい体を持ち、国際社会で信頼と尊敬を得る人間の育成」を掲げ、教育活動を行っています。「よく学び、よく遊ぶ」「開く学校経営」などを方針として、学校の特色を生かしながら推進しています。実践の重点としては、①あいさつの徹底②個に応じた指導の充実③基礎基本の習熟の徹底と発展的な学習への工夫・改善④本校の特色を生かした体験的な学習の充実⑤発達段階に応じた体力の向上⑥特別支援教育の推進⑦危機管理上の取り

組み⑧新学習指導要領への対応等に取り組んできました。その中で、今回は④⑤についてより具体的に説明したいと思います。

④体験的な学習～サンパウロ市郊外の標高730mの岡に広がる約12万平方メートルの自然豊かな広い敷地が本校の魅力です。そのほか、運動場・体育館・大プール・小プール・保健室・図書室・理科室など施設が充実しています。そんな中で子どもたちはのびのびと生活していますが、中でも私が一番気に入っていたのは豊かな自然



体験です。

広い敷地内には、コーヒー園があり、年に一度全校でコーヒー狩りをおこないます。そのあとは、焙煎したてのコーヒーをみんなでいただきます。

バナナ園もあり、昨年は小学部でバナナ狩りをしました。バナナの木をナタで切ったり、削ったりしました。そのほか、クリ、ミカン、アボガド、カキ、キイチゴなどの果樹、樹木、花が豊富にあり、果物は取り放題、食べ放題なので休み時間になると、子どもたちは楽しそうにとって食べています。

敷地内には小ジャングルもあり、アウトドアクラブなどで、ジャングル探検や基地作りなどをします。活動が始まると子どもたちは、笑顔で夢中になって取り組んでいました。しかし、虫や見たことのない生物もいるので、気をつけなければいけません。



また、敷地内には釣りができる「釣り堀」もあります。

総合的な学習の時間やクラブの時間、また高学年は休み時間に自由に釣りをして楽しめます。最後の一年は、私自身6年担任だったこともあり、子どもたちとジャングルから竹をとってきて、自分の釣り竿を作って「MY釣り竿」で釣りを楽しみました。釣れる魚は「テラピア」という魚や「鯉」などです。大きなものだと30cmを超える魚を釣る子もいます。参観日などに親子で釣り大会などができるのも、とても楽しい学習でした。



⑤体力の向上～本校は前述した通り、治安がよいとは言えません。ですから、放課後子どもたちは、学校から帰ると遊びに行くのも、保護者と手をつないで友だちのアパートにいて、遊び終わったら保護者が迎えに来て帰るとというのが一般的です。公園で走り回ったり、外に行き、子どもだけで遊んだりすることはできません。

そのため、保護者は学校での「体力の向上」にとっても強く関心をもたれていました。

私自身専門が保健体育なので、本校の実態を体力テストのデータをもとに調査し、具体的な取り組みを考えてみました。

赴任して一年目で感じたことは、投力の

低下でした。ブラジルという国柄もあるでしょうが、子どもたちの遊びと云ったら、やはりサッカーが主流、投げると云う動作はなかなか身につけていませんでした。そこで、朝の学習の中で週に一回、小学部全体で運動をする日（アミーゴス活動）を設け、縦割りで色々な種目に挑戦させました。すぐに成果はでませんでした。子どもたちは楽しく運動に関心をもち、活動することができました。

年に一回は、その活動の成果を発揮しようという取り組みで、「カンポリンピック」というのを開催し、盛り上がりました。

二・三年目では、持久力の向上を目指し、週に一回朝マラソンの日を設定し、取り組みました。みんなが同じコースを走るのではなく、「イグアスコース」「パンタナールコース」という二つのコースを設定し、子どもが自由に選ぶことができるようにして無理なく実施しました。「イグアスコース」は全長一キロメートルでタイムを計ります。「パンタナールコース」はゆっくり自分のペースで休まず、約八〇〇メートルほどのコースを走ります。最初はそれぞれのコース半分ずつくらいの人数でしたが、三学期頃になると、みんなが自己記録更新を目指して、イグアスコースに挑戦していました。一年間で第一回目の記録と最終の記録との差は、一位の子で五十秒近く更新することができました。素晴らしい成果だと感じています。

## (2) 通勤

赴任当初は、契約タクシーに乗り合わせて通勤します。学校までの距離は約20km、所要時間は約40分。勤務開始が7時50分なので、6時50分にフラッチ（ホテル）に迎えに来てくれ、退勤時にはその車両で帰宅します。

車を購入した後は、自家用車またはこれまで通り契約タクシーのいずれかを選択し

て通勤することになります。近年は安全上、2人以上の組を作り、自家用車で通勤することが多くなっています。

勤務終了は4時20分ですが、行事の準備などで遅くなる事もあります。しかし、治安上の理由から、5時30分までには退



勤することにしていました。学校周辺はサンパウロ市内の中でも特に治安の悪い地域でしたので、暗くなると危険ということも



あり、どうしても先生方でうち合わせ等をしたときには、居住区にもどってから、会議とい

うこともありました。

なお、「ホジジョ」といって、公害対策や渋滞緩和策などの理由で朝夕、車に乗れない日が週に1日あります。ナンバープレートの下一桁の数字で曜日が決められています。ホジジョの日は、近くに住む派遣教員の車に乗り合わせるなどして対応しています。

## (3) 勤務と学校行事

職員は派遣教員の他、現地採用教員、事務員、労務員、警備員がいます。派遣教員は、全国各地から来ているため、多様な生活習慣や教育観をもっており、お互いに交流し合うことによって、幅広い人間関係を結んでいます。

校務分掌組織により、各人の校務分担がはっきりしています。また、大きな行事は全職員、全校体制で取り組んでいます。施設、備品、教具などはほぼ充足していますが、慣れないことも多々ありました。しかし、慣れるにつれて、創意工夫をして満足のいく勤務ができるように

なりました。

また、日本人学校の特徴として、頻繁にある児童・生徒の転出入の対応と、現地校との交流など対外関係行事への参加などを的確、迅速に行うことが要求されま  
す。それに加え、日本とは違う外国ならではの事柄、例えば、保健安全面の指導、  
現地での教材などの購入経路の発掘と購入方法を考慮しなければなりません。また、  
児童・生徒が必ず決まった時間にスクールバスで下校するため、委員会や行事の  
準備の時間の取り方を工夫するなど、数多くの柔軟な対応が求められます。

加えて、保護者の教育や学校への関心も高く、保護者との連携をしっかりと



りながら学校教育に当たることが不可欠です。保護者は新しく  
きた先生は、「どんな力のある人なの？」という

プレッシャーを与えてくれます。「普通にできて当然」プラスアルファを求めている保護者が多く、働いていてその点が  
ひしひしと感じたので、わたし自身も日々学習の毎日でした。

小学部・中学部とも、社会科見学、宿泊学習、遠足、修学旅行など、校外学習の機会も多くあります。



#### (4) 教育体制



小学部と中学部があり、両学部一貫した学校運営を行っています。小学部から  
中学部への進学、小中合同の運動会・カンポリンポ祭（文化祭）の実施など、小学部  
1年から中学部3年までが一体とな  
って活動しています。また、教員の授業交流や研究、研修などにより、一貫教育の  
効果を上げるべく努力をしています。

教育課程は日本国内に準拠していますが、現地理解教育を取り入れている関係で、  
多少国内と違っている点もあります（ポルトガル語履修・ブラジル理解教育など）。

#### (5) その他

ブラジル人との関わり

～剣道を通して～

ブラジルでの生活の中で、私自身にとって大変貴重だったのが、現地の方との交流  
でした。私は子どものころから剣道をしています。ブラジルでも剣道ができればと、  
防具を持ち、ブラジルに行きました。

私は日本人学校で何をしたいか？と文部科学省での面接で聞かれました。そのとき  
私は、学校での教育はもちろん、世界のどこの国に行っても、日本の良き伝統文化の  
一つである「剣道」を世界の人々に知っていただけるような活動をしたと言いま  
した。派遣先がブラジルと決まり、それがこのブラジルでできるか？と疑心暗鬼な気持  
ちで来伯しましたが、心配は無用でした。ブラジルではたくさんの道場があり、ど  
この道場でもみな熱心に稽古に励んでいました。日本人にも引けを取らないくらい真  
剣に剣道に取り組む人たちが、とてもたくさ

んいたのです。私は、技の面でも、心の面でも、日本で自分が行っていた以上の稽古を、ブラジルの方々と体感することができ



ました。

私自身防具はもってきたものの、竹刀は荷物になるためにもっていくことができませんでした。サンパウロに着き、同僚に質問をしました。「ブラジルで剣道はできますか？」という私の問いに、サンパウロにはたくさんの道場があること、その同僚藤原氏も剣道をしていることを教えてくれました。藤原氏は竹刀をすぐに私に下さり、さっそく稽古に連れて行ってくださいました。三重県人会の建物をお借りして、週2回練習している道場でした。40名ほどの方が稽古をされていました。人の多さに驚きました。私自身少年指導を日本でしていて、徐々に少なくなる子どもの練習人数を寂しく思っていました。ブラジルの稽古を見て嬉しい気持ちになり、すぐに仲間に入れてもらいました。

3年に一度行われる世界剣道選手権大会が、幸運にも2009年サンパウロで行われました。私が派遣された年です。地元開催に向け、ブラジル剣道連盟は、一年以上前から、計画的に、合同稽古会・合同合宿を行いました。私は、赴任してから大会開催までの5ヶ月間、ブラジル代表チームのメンバーと稽古をしたり、合宿をしたりする機会に恵まれました。染谷先生という監

督は、とても厳しい稽古を選手に課しました。それでも選手はついていきました。染谷先生がいつもおっしゃっていたことは、「正しい剣道をして勝つんだ。」ということでした。ブラジルは正しく、きれいな剣道で勝つということをいつも選手に言っていました。大会では、ブラジルチームは男子・女子ともに団体戦で3位。女子個人戦で3位という、近年では最高の成績を残しました。私は大会運営のスタッフとして働くことができました。本当に良い経験をさせていただきました。

本校は近所にある現地校、コンコルジア校と年2回の交流を行っています。1回目は我々が現地校を訪れ、ブラジルの遊びなどを教えてもらい、2回目は現地校が本校を訪れ、日本文化を学びます。我が校ではカンポリンポ祭という文化祭で剣道の劇をしました。私が1年目の時です。そこでカンポリンポ祭で剣道の劇をしたこの年は、みんなで現地校の子に剣道を教えました。日系人にはよく知られている剣道も、ブラジル人にはあまりなじみがありません。まず、子供たちは本校の竹やぶに竹を取りに行き、その竹で竹刀を作りました。そして、子どもたちは、劇のために自分たちが覚えた正座や礼の仕方、素振りや足さばき、剣道具のつけ方などをポルトガル語で現地の子供たちに教えました。また、各校代表者を募って、試合もしました。彼らが帰る時には作った竹刀をプレゼントとして贈りました。

私は新卒から北海道で14年間、少年剣道の指導に携わってき



ました。その指導法を少しでもブラジル剣



道に還元することができればよいと考えていました。今回お世話になった三重剣道部では、そんな私の思いを受け入れて下さり、指導を任せてくださいました。少年指導はしていても、大人の指導は日本ではなかなかやりません。大人がそんなに一生懸命稽古しているところはさほど無いからです。しかし、ブラジルの大人たちは違いました。みんな子どもと同じように、きつい稽古に励んでいたのです。そんな大人から子どもたちまで熱心に稽古している人にどのような指導法が良いのか悩むときもありました。しかし、一生懸命指導することで、お互いの気持ちが伝わり合うことを肌で感じることができました。指導法をどうにかこのブラジルの地に残していきたいという思いから、指導者を対象に話し合いをもち資料を参考にしながら、指導者の難しさや悩み、共通理解を図る大切さについて考えました。三重剣道部も日本人、日系人、そしてブラジル人と初心者の方が多く入ってきています。私がいた3年間で、日本人学校の子どもが剣道を習い始め0人から、2012年3月現在では、小学部・中学部合わせて19名になりました。まさに剣道ブーム到来といった感じです。この盛り上がり大切に、より剣道の楽しさを味わってもらいたいと切に願っています。

私にとってこのブラジルでの剣道は、生活の一部であり、ブラジル人剣士とのつな

がりはこれから先も大切にしていこうと思っています。

私は剣道という武道を通じて、かけがえない「人」とのつながりを得ることができました。そのつながりは生涯とぎれることはないと自負しております。日本人学校の子どもたちには、一つのことを長く続けることで得ることのできるものは、自分にとって一生の宝物になると自信を持って話をしてきました。本当によい経験をさせていただきました。

#### IV、終わりに

この3年間を通して、多くのことを学ぶことができました。また、この地からでしか行くことのできない旅行もして、お金では買うことのできない貴重な体験をさせていただきました。

これからブラジル経済は発展することが予想されます。2014年・2016年には、それぞれサッカーワールドカップ・オリンピックと国をあげての大きな行事もあり、どんどん進化していくことでしょう。日本企業の進出も多くなってきており、日本人学校の人数も徐々に増加が見込まれます。今後、サンパウロ日本人学校がより発展し進化した姿を、近い将来必ずサンパウロに足を運んで、自分の目で自分の足跡とともに確認していきたいと思っています。



ブラジルの魅力